

紡錘形ほどの、灰

最初

よしむね

そこに

紡錘形ほどの

灰が降った

ひとしきり

微かに

ひとひらの、雪のように

濃い雫のように

重い塵のように

破片がうずまき

散った、散ってきた、散って行った

この世の、闇

この世の、光

この世の、海

なくなった、なくなった

なにかも

静かさのようなのがしみ透っていった

風のさけめのようなものだけが通りすぎていった

ひとはただ見上げていた

青い空の、青いうずまき

（見えない閃光が　上空を　擦過していった）

それからあるひとは荒れた浜辺を目指した

ほかのひとは枯れた丘のうえへ移っていった

散り散りになった

そしてどれだけの時が 蛇行していったのだろう

どれだけの時の先が曲がっていったのだろう

（灰は 幾重にも幾重にもしずかにふき積もっていった）

かつて果てのない海があつた

果てのない声があつた

果てのないめぐりがあつた

果てのすべてがなくなった

（小鳥たちが円い空から消えていった）

ただ、縫い閉じられ

押し込められ

かためられて

ただ、閉じ込められ

隔離され

封印されて

灰

ここにありそこにある

ここになくそこにもない

灰

どこにでもある、灰

（ただ隠されただけ）

（見えない焔はいまも燃えていて）

だから

ひとしきり灰のなかに雪よ降れ

灰のなかで水よ生まれよ

灰のなかを雨でいっぱいに満たせ

灰のなかに

灰のなかで

灰のなかを

もう一度

ある日、ひとりの男^{ひと}が地面に円を描きながら

そこにやって来た

そこが、庭

ひとつの、星型の、庭

そこから、もうひとつの、空が始まる、虹の庭

（灰は 幾重にも幾重にもしずかにふき積もっていった）

その男は庭に変わった植物を植えて育てはじめた

不思議な形のオブジェをつくり周りに立てた

たとえば曲がつた杭のような鋼の板

未知を知らせる奇妙な文字盤の時計

墓標のようなショベル

絡まりあつたリングの輪

どんなかたちにもなる、不思議なものたち、地上のものたち

（そしてどれだけの時が 蛇行していったのだろう）

（どれだけの時の先が曲がっていったのだろう）

ここは、荒れて蒸発した土地

行き止まりの土地

沈んでゆく浜辺

壊れてゆく曳き船

—でもこの庭の名もない植物たちが

どうか少しでも高い草木になりますように

—小さな花がきつと隙間を埋めるまで咲きつくしますように

—いつか誰かがこの花たちを見つけてくれますように

その男は^{ひと}がれきの地面に横になり夜空を見上げた

なにも見えない夜空のかたむき

彼方の白さ

（灰は いまもしずかにふき積もっていた）

どこまでも、伽藍堂の

うずまき

遠く遠く

でもそこに

紡錘形ほどの

光が降ってきた（ようにおもえた）

かすかに

（粒々の）

あるいは波状の

ひとしきり

濡れて

光りはじめた

小さなうねりが

（うずまいてきた、うずまいていた）

露の
よ
う
な
も
の
が

（
ウ
マ
レ
タ
、
ウ
マ
レ
テ
キ
タ
）

コノ世ノ、闇

コノ世ノ、光

コノ世ノ、海